

## Bartholomew らの 4 分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成

加藤和生<sup>1</sup>  
九州大学

### Japanese adaptation of Bartholomew et al. (1991)'s adult attachment scale (RQ)

Kazuo Kato  
Kyushu University

This study attempted (1) to adapt into Japanese the Relationship Questionnaire (RQ) for adult attachment to "generalized other," which Bartholomew & Horowitz (1991) originally designed and developed to measure the 4 styles of adult attachment in close relationships, and (2) to examine its construct validities. 299 college students were asked to respond to a series of questions, including RQ, Rosenberg's self-esteem scale, and Kato's other-view scale for an index of self-view and other-view. As a result, this scale was demonstrated to have adequate construct validities with Japanese samples. Furthermore, Preoccupied (47%) was the most prevalent adult attachment style in Japan, followed by Fearful (29%), Secure (19%), and Dismissing (7%), which is, however, inconsistent to the distribution pattern of attachment styles in the US. Its implications and remaining tasks were discussed in relation to the following theoretical issues, such as self-report vs. behavioral indices, representational structure of IWMs, cross-cultural differences, and attachment vs. *amae*.

**Keywords:** adult attachment, Relationship Questionnaire (RQ), Japanese adaptation, construct validity, measurement

#### 問 題

本研究は、次の2つの目的で行った。第1は、人格・社会心理学研究の流れの中で、成人愛着のスタイルを測定するために近年主に使われるようになってきた4分類の愛着スタイル尺度、「関係尺度 (Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991, 以後 RQ と略す) の日本語版を作成するである。第2は、その構成概念妥当性を検討することである。

#### Bowlby の愛着理論

Bowlby (1969/1982, p 371) は、当時の認知論・行動比較論・進化論・サイバネティクスなどの理論を援用しながら、愛着に関する理論的枠組みを構築した。彼は、

愛着行動系が進化の過程で捕食者から身を守るために生得的に組み込まれた行動系であり、その後の具体的な他者 (主たる養育者) とのやり取りを通してより適応的な行動系へと発展していくと仮定した。また、愛着を次のように定義している。すなわち、愛着とは、子どもが distressful な状況 (危険を感じる時、怖いとき、疲れたときなど) に置かれたときに、主要な養育者 (ある特定の愛着対象で、通常は母親である) との近接性を維持したり、回復したりしようとする強い傾性 (disposition) であるとした。言い換えると、乳幼児は、愛着場面 (distressful な状況で愛着行動が起こる場面) に遭遇したときに、安全感を確保したり distress を軽減したりするために、主要な養育者に対して愛着行動を行う。それが繰り返される中で、愛着行動とそれに対応する愛着対象の行動のパターンが形成されるようになる。このように両者のやり取りがパターン化されるに伴い、幼児の中ではそれが一つの知識構造を形成するようになる。例えば、怖い動物が出てきたら、泣き出す。すると、母親がその声を聞いて、自分の側に駆け寄り、自分を抱き上げてくれるといったパターンである。発達に伴い、こうし

1 本研究のデータは大きなプロジェクトの一部として収集されたものである。データ整理をしてくれた小林美緒さんに感謝いたします。本研究に関する問い合わせは、次のアドレスまで：  
kkatoedu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

たやり取りのパターンは多様化すると同時に、子どもはそれを記憶知識として保持するようになる。その結果、類似した場面では、自分はどのような行動をとり、母親はどのように反応するかを予想するようになる。このように一連の出来事ややり取り（認知的・情動的側面を含む）が、メンタルモデルとして機能するようになる。Bowlbyは、このような知識構造を、当時の認知理論を援用して愛着行動に関する「内的な作業モデル（Internal working model, 以後、IWMと略す）」と呼んだ。こうした知識構造は、一端形成されると、容易には変容しない（例えば、Fiske & Taylor, 1991）。この原理にもとづき、Bowlbyは、愛着行動のパターン（IWM）が、時間や状況の変化に伴い徐々に変化することはあるが、基本的には半永続的に持続し、その後の対人関係に大きく影響すると仮定した。

Bowlbyが理論化したのは、愛着の標準的な側面（normative）であったが、その後の愛着研究はむしろ愛着パターン（あるいはそのもとなっていると想定されているIWM）の個人差に注目が向けられる。

### 愛着スタイル尺度の開発研究

Bowlbyが理論を構築する一方で、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) はその実証的検証を行った。彼女らは、幼児をある一連のセッションからなる場面に置き、その場面对する子どもの反応を観察し分類することで、愛着行動パターン<sup>2</sup>を査定した。この方法は、Strange Situation Procedure (SSP) 法と呼ばれる。Ainsworthらは、この方法により、3つの愛着分類（あるいはパターン）を識別した。すなわち、安定型（secure）、回避型（avoidant）、不安・両価型（anxious/ambivalent）の3つである。また、これら3つに分類不能なものを「分類不能（unclassifiable）」とし、新たにカテゴリーを設けた。このカテゴリーはその後、Main & Weston (1981) によりさらに検討され、混乱型（disorganized/disoriented）として分類されるようになる。更に、青年期・成人期での愛着を検討するために、Main & George (Main, Kaplan, & Cassidy, 1985で引用) は、SSP法の分類コードを基準として成人愛着面接法（Adult Attachment Interview, AAI）を開発している。

一方、人格・社会心理学の領域では、Bowlbyの愛着理論やAinsworthらのこれらの知見を、成人の恋愛（romantic love）に適用しようとする試みがなされた。Hazan & Shaver (1987) は、「恋愛は、愛着の過程（愛着を形成していく過程）であり、人により愛着の個人史が異なるため、その過程を異なったものとして体験する（p. 513）」と考えた。この考えにもとづき、彼女らはAinsworthら（1978）の幼児の記述を成人の恋愛に適合した表現に翻訳することで（p. 531）、上述の3つの愛着ス

タイル<sup>3</sup>を測定するための単項目尺度を開発した（日本語版は、加藤・丸野, 1997）。その後、この3分類による研究が、人格・社会心理学の領域でもなされるようになる。

ところが、Bartholomew & Horowitz (1991) は、Hazanらの尺度を用いたその後の研究結果（e.g., Feeney & Noller, 1990）やMainらのAAI法を用いた結果（Kobak & Sceery, 1988）のズレに注目し、それぞれの方法で測定されている回避型の内実が異なるのではないかという問題提起を行った。そして、混乱した研究結果に理論的な整合性を与えるために、新しい枠組みを提案した。それが、2つの次元で4つの愛着スタイルを分類する2次元4分類モデルである。

このモデルとは、次のようなものであった。すなわち、Bowlby理論（1973）によると、愛着のIWMは、次の2つの要素から構成されているとする。“一つは他者に関するモデルで、愛着対象は一般的に援助や保護を求めたときにすぐに応答してくれるような人であるかどうかであり、もう一つは自己に関するもので、自己は誰でも（anyone）あるいは特に愛着対象が援助的に対応してくれる種類の人間であるかどうか（p. 204）”の2つの要素からなっているとしている。言い換えると、他者に関するモデル（以後、他者観と呼ぶ）と自己に関するモデル（以後、自己観と呼ぶ）の性質（positiveかnegativeか）により異なる愛着の内的作業モデルができあがるというのである。その際、彼女らは、自己観・他者観について、次のように仮定した。すなわち、自己観を、「自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度」と考える。よって、他者からの受容への依存性が低いことは、自尊感情を自分自身で維持できるということであり、外的な受容に依存する必要がない。言い換えると、依存性が低いほど自己観はポジティブであり、依存性が高いほど自己観はネガティブであると概念化できるということである。一方、他者観は「親密さの回避」の次元と考えられており、親密性を回避するほど他者観はネガティブに、回避しないほど他者観はポジティブになると考えている。そして、この2つのモデルがポジティブであるかネガティブであるかにより、4つの愛着スタイルが区別される。これら4つの愛着スタイルのプロトタイプを記述したものが、以下である。

2 ここで、異なった愛着分類あるいはパターンが存在するということは、愛着行動を規定するIWMにも養育者との日々のやり取りのパターンにより、異なった種類のものが形成されることを意味する。

3 愛着スタイルという言葉は、人格・社会心理学研究の中では、発達心理学研究の中の愛着分類あるいは愛着パターンという言葉とほぼ同義語で用いられている。

**安定型 (自己観: Positive, 他者観: Positive)**

親密な友人関係を大切にす、個人的な自律性を失うことなく親しい関係を維持する能力がある、対人関係やそれに関わる問題を議論するとき一貫性があり思慮深い。

**拒絶型 (自己観: Positive, 他者観: Negative)**

親密な関係の重要性を過小評価する、情動性が制限されている、独立性と自律性を重視する、対人関係について議論するとき明瞭さや信頼性に欠ける。

**とらわれ型 (自己観: Negative, 他者観: Positive)**

親密な関係に過剰にのめり込む、自分の幸福感を持つ上で他の人の受容に依存している、対人関係について議論するとき一貫性がなく情動を大げさに表出する。

**恐れ型 (自己観: Negative, 他者観: Negative)**

拒絶されることへの恐怖、自分の安全感、他者への不信感から親しい関係を回避する。(Bartholomew & Horowitz, 1991, p. 228, 著者邦訳)

なお、このモデルの重要な点は、自己観と他者観という2次元で捉え直している点にある。というのは、理論的経済性の観点からすると、より少ない変数で愛着の個人差を説明できるからである。

さて、この4分類モデルにもとづき、それまでの研究の問題点を整理してみると、次のようになる。Hazan らの回避 (avoidant) 型の定義あるいは尺度項目の記述文は、「相手に対する不信感と親密さへの拒絶感」しか表現されていない。これは、Bartholomew らの観点からすると他者観がネガティブであることを意味する。だが、この記述文の中には自己観についてポジティブなかネガティブなかを示す表現がない。そのため、Hazan らの回避 (avoidant) 群には、Bartholomew らの観点からすると自己観がポジティブな拒絶型と自己観がネガティブな恐れ型の2群が混入している可能性がある。(因みに、Hazan らの尺度項目の記述文の中には、安全型と両価型では、自己観がポジティブであるかネガティブであるかを示す部分が含まれている。) よって、この2群を明確に分ける必要があるというのである。

これらの点を実証的に裏付ける研究として Bartholomew らは次の研究をあげている。すなわち、Hazan らの尺度を用いた Feeney & Noller (1990) では、avoidant は、自己懐疑性 (self-doubt) がより高く、他者から受容される感じが低いという結果を得ている。この結果は、自己観が低く、他者観も低い可能性を示唆するものと考えることができる。それに対して、Main らの AAI 法にもとづいて行った Kobak & Sceery (1988) の結果では、dismissive (avoidant と同じ) 型は、自己が distressed することがあまりなく、他者はサポータータイプでないと見なしてい

ることを示していた。このことは、自己観は比較的ポジティブであるが、他者観はネガティブなことを示唆すると言えよう。すなわち、2つの方法で分類された同じ型 (avoidant あるいは dismissive) の中に、自己観がポジティブなものネガティブなもの2つが混ざっている可能性が高いと言うことが、ここからうかがえるといえよう。

このように、3分類モデルでは avoidant (あるいは dismissive) という1つのカテゴリーに入る人たちの中に、2種類の異なった群が存在する可能性がある。そして、Bartholomew らが提案する2つの次元の組み合わせでこれらを整理することで、より理論的に整合性のある分類が可能となるのである。

以上の問題意識から、彼女らは、研究1で77名の大学生を対象に、「友人関係および相互にどのくらいよく知っているかに関する研究」という名目で、準構造化面接と質問紙調査を行っている。まず面接では、友人関係・恋愛関係について、そして親密な関係に対して持っている気持ちについて述べるように求めた。この面接はテープ録音され逐語文に直された。それにもとづき、上述の愛着スタイルのプロトタイプそれぞれとの程度類似しているかが9件尺度で評定された。また、質問紙には、自己観・他者観に関連する複数の既存尺度バッテリーおよび本研究で取り上げる RQ が含まれており、自己評定が求められた。なおこれに加えて、この質問紙は、被験者が連れてきた友人に対しても、「被験者がこう答えるだろうという視点からではなく、あなたから見た被験者がどのようなかにもとづいて回答してください」という教示のもとに評定を求めた。

ここで注目される結果は、①面接録の評定、自己評定、友人評定の3つの評定値を主成分分析したところ、3つの方法で測定された同じスタイルが、2次元座標の同一象限にまとまる事が確認されたということだ。というのは、RQが2つの外的な基準(面接法と友人評定)と対応していることを示しており、RQの基準関連妥当性を実証するものであるからだ。また②自己観・他者観に関連する尺度得点が、理論的に想定される方向で、4つのスタイル間に有意差が認められた。このことは、RQの構成概念妥当性を実証するものである。以上のことから、RQは2次元4分類の愛着スタイル尺度として十分使用可能な、妥当性のある尺度と見なせるであろう。

そこで、本研究では、こうした尺度の日本語版が存在しない現状を踏まえ、RQの日本語版(一般他者版)を作成する。また、自己観・他者観を反映すると想定される尺度を同時に実施することで、理論的に想定される値の差異を検証し、日本でも構成概念妥当性が確認できるかどうかを検討する。さらに得られた結果を踏まえながら、RQに関わる理論的な問題を考察する。

なお、Bartholomewら(1991)の研究では、RQに回答させる際、被験者に愛着対象を明確に教示していない。すなわち、RQの項目文を読む限りでは、一般他者に対して評定を求めているとも読めるであろうし、研究を導入する際に被験者に伝えた名目を考慮するならば友人関係に関する問いであると被験者が理解していた可能性もある。そのため、回答する際、被験者がどの対象(友人、恋人、家族など)を想定しているかが明確でない。もし愛着対象により愛着スタイルが異なるとするならば、誰を念頭において評定をするのかを明確に教示しておく必要があるだろう。そこで、本研究では愛着対象として一般他者を想定させるように明確に教示を行った。

## 方法

**対象** 回答者は、大学生318名(男=125, 女=180, 平均年齢=19.54,  $SD=1.33$ )であった。

**質問紙** 本研究で用いた質問は、いくつかの目的でデザインされた質問紙の一部を構成していた。本調査で用いた質問項目は、以下の3つの部分から成っていた。

**RQ** RQは、「一般他者(人)」との関係について4つの愛着スタイルの特徴を記述した文章からなっている(Appendixを参照)。被験者は、まず、「人に対する感じ方のタイプ」として導入された4つの文章(愛着スタイルの記述文)のそれぞれについて、どの程度自分に一致しているかを、7件尺度(1=まったくあてはまらない, 7=非常にあてはまる)で自己評定する。次に、その4つのスタイルから自分に最も当てはまると思うスタイルを1つ選択することが求められた。

分析に際しては、最後に一つ選ばせた愛着スタイルをその被験者の愛着スタイルと見なした。これにもとづき、他の変数との関係を分析する。もう一つのデータの扱い方は、Griffin & Bartholomew (1994)の提案に従い、自己観得点と他者観得点を算出するというものである(Table 1注を参照)。

なお、日本語訳を作成するに当たっては、まず1名の者(在米9年間)が日本語に翻訳し、それを他の1名(在米7年間)が英語に翻訳した。そして、両者を意味的等価性の観点から検討し、翻訳文に必要な修正を行った。

**自尊感情尺度** 自己観を測定するための尺度として、Bartholomewら(1991)に従い、Rosenbergの自尊感情尺度を用いた。本研究で得られたデータを分析した結果では、 $\alpha$ 係数は.81と、十分な内的整合性があることが確認された。

**他者観尺度** 他者観を測定するための尺度として、加藤(1998)の開発した他者観尺度を用いた。この尺度は、因子分析の結果、「他者は援助的・よいもの」(10項目)と

「他者は悪、信用できない」(8項目)との2因子からなる18項目の尺度である。本研究で得られたデータを分析した結果では、 $\alpha$ 係数は全体で.85(各因子では.84, .78)と十分な内的整合性があることが確認された。

**手続き** 質問紙の実施にあたり、授業のはじめに質問紙の説明や教示を与え、1週間後の授業時間に回収した。質問紙全体への回答の所要時間は、ほぼ1時間であった。

## 結果

### 愛着スタイルの割合

RQ評定の最終で「もっとも自分に合う愛着スタイル」として選ばせたスタイルの選択者の割合は、安定型(19%)、拒絶型(7%)、とらわれ型(47%)、恐れ型(29%)となった(Table 1)。因みに、Bartholomewらのアメリカ人大学生の面接法で得られた結果( $n=77$ 名)では、安定型(47%)、拒絶型(18%)、とらわれ型(14%)、恐れ型(21%)であった(なお、彼女らはRQにもとづく分類の頻度は報告していない)。

両者の比較から明らかのように、日本では、とらわれ型の割合が、一方アメリカでは安定型がもっとも高い割合を示している。それに対して、もっとも少ない愛着スタイルは、日本では拒絶型であったのに対して、アメリカではとらわれ型であった。

### 構成概念的妥当性の検討

Bartholomewらは、4つの愛着スタイルの違いを規定する要因として自己観と他者観の2つの次元を理論的に想定している。そこで、自己観と他者観を反映すると予想される自尊感情尺度と他者観尺度の得点において、理論的に想定される方向で、4つの愛着スタイル群の間に違いが認められるかどうかを検討した。具体的には、まず自己観については、自己観がポジティブと仮定される安定型と拒絶型は、ネガティブと仮定されているとらわれ型と恐れ型よりも、自尊感情得点において有意に高くなることが予想される。一方、他者観については、他者観がポジティブと仮定されている安定型ととらわれ型が、ネガティブと仮定されている拒絶型と恐れ型よりも、他者観尺度得点において有意に高くなることが予想される。

なお、自己観と他者観は、概念的には2つに識別される。だが、Bowlbyが想定するように、distressの場面で愛着行動をすることで他者(母親)が常に居てくれて応答してくれる経験を通じて、その他者から受け入れられることで他者への信頼感も高まり、同時にそのように受け入れられる自分を(他者がそのように扱ってくれる以上)好ましいものと考えられるようになるとするならば、自己観・他者観の間にある程度の共変する側面が存在する

Table 1. Scores of Self-View and Other-View for 4 attachment style groups: Two indices

Theoretical Classification	Positive		Negative		Positive		Negative		Results of ANCOVA						Covariate Coefficient	
	Self View		Other View		Preoccupied		Fearful		Main Effect		Self View		Other View			Interaction
Attachment Style	Secure	Dismissing	Preoccupied	Fearful	M	SD	M	SD	F	p	F	p	F	p	F	p
<i>n</i> (%)=	58 (19.4)	22 (7.4)	139 (46.5)	80 (26.8)												
Existing Scales																
Self-View Score	4.59 (.93)	4.17 (.99)	3.75 (.88)	3.54 (.80)					31.38	.00	.82	.37	.49	.48		.52
Other-View Score	4.39 (.52)	3.89 (.49)	4.00 (.64)	3.62 (.71)					5.69	.02	23.08	.00	.08	.22		.26
Scores based upon Griffin et al.'s procedure of computation for two dimensions																
Self-View Score	2.45 (2.33)	2.27 (2.43)	-4.04 (2.86)	-3.79 (2.64)					306.19	.00	4.69	.03	.22	.63		.23
Other-View Score	3.38 (2.15)	-1.73 (2.51)	2.33 (2.29)	-2.41 (1.93)					.18	.67	332.01	.00	.25	.62		.16

Note 1: *N* =299

Note 2: Scores in apprentices are theoretically expected to be higher than those without.

Note 3: For existing scales for self view and other view, Rosenberg's self esteem and Kato's Other-view scales were used.

Note 4: Based upon Griffin & Bartholomew (1994) procedure, the scores for the dimensions for Self-View and Other-View were

derived from the ratings for 4 attachment style in RQ:

Self-View score = ((Secure rating+Dismissing rating)-(Preoccupied rating+Fearful rating))

Other-View score = ((Secure rating+Preoccupied rating)-(Dismissing rating+Fearful rating))

と予想される。

この可能性を検討するために、それぞれに対応すると予想される Rosenberg の自尊感情尺度と加藤の他者観尺度との相関係数を求めたところ、 $r=.37$  ( $p<.01$ )であった。よって、両次元は完全に一致するものではないが、ある程度の共変量（共変量=約14%）があることが分かる。

#### Rosenberg 自尊感情尺度と加藤の他者観尺度を用いての分析

そこで、上述の仮説を検証するために、一方の得点の影響を統制し、他方の得点での自己観・他者観の効果を検討するために、共分散分析を行った。まず、自尊感情尺度得点について2（自己観：ポジティブ・ネガティブ）×2（他者観：ポジティブ・ネガティブ）の共分散分析を行った。その際、他者観尺度得点を共変量とした。逆に、他者観尺度得点について共分散分析を行うときには、自己観得点を共変量とした。

その結果、Table 1から分かるように、自己観・他者観に関する仮説は、理論から予想される方向にあることが確認された。すなわち、自尊感情得点に関する結果では、自己観の主効果のみが有意となり ( $F(1, 294)=31.38$ ,  $p<.001$ )、他者観の主効果および交互作用は有意でなかった（それぞれ、 $F(1, 294)=.82$ ,  $ns$ ;  $F(1, 294)=.49$ ,  $ns$ ）。言い換えると、自尊感情得点では、安定型と拒絶型が、とらわれ型と恐れ型よりも、有意に高くなっていたことを示している。（なお、他者観の回帰係数は、.52であった。）

一方、他者観尺度得点に関する結果では、他者観の主効果が高い水準で有意となり ( $F(1, 294)=23.08$ ,  $p<.001$ )、交互作用は有意でなかった ( $F(1, 294)=.08$ ,  $ns$ )。だが、自己観の主効果は、予期に反して、有意水準に達していた ( $F(1, 294)=5.69$ ,  $p<.02$ )。このことは、自己観得点を共変量として統制したが、他者観得点の中に Rosenberg 自尊感情尺度では測定されていない自己観の要素が含まれていることを示唆するものであろう。だが全般的には、理論的に想定された方向の結果であり、安定型ととらわれ型が拒絶型と恐れ型よりも他者観において有意に高いことを示すものといえよう。（なお、他者観の回帰係数は、.26であった。）

#### Griffin らの算出法による自己観・他者観得点を用いての分析

同様に、Griffin らの自己観得点と他者観得点について2（自己観）×2（他者観）の共分散分析を行った。Table 1（下段）から分かるように、既存尺度の結果とほぼ同様の結果がえられた。すなわち、自己観得点に関する結果では、自己観の主効果が有意となった ( $F(1, 294)=306.19$ ,  $p<.001$ )。だが交互作用は有意でなかった ( $F(1, 294)=.22$ ,  $ns$ )。他者観の主効果は、予想に反して、有意となった ( $F(1, 294)=4.69$ ,  $p<.03$ )。この結果も、全般的には理論

的に想定された方向の結果であり、自己観得点では、安定型と拒絶型が、とらわれ型と恐れ型よりも高いことを示している。（なお、他者観の回帰係数は、.23であった。）

一方、他者観得点に関する結果では、他者観の主効果が高い水準で有意となった ( $F(1, 294)=332.01$ ,  $p<.001$ )。だが、自己観の主効果および交互作用は有意でなかった ( $F(1, 294)=.18$ ,  $ns$ ;  $F(1, 294)=.25$ ,  $ns$ )。言い換えると、理論的に予想されたとおり、他者観では、安定型ととらわれ型が、拒絶型と恐れ型よりも高いことを示すものと言える。（なお、他者観の回帰係数は、.16であった。）

なお、既存尺度による結果と Griffin らの指標に基づく結果で、前者では他者観得点の中に自己観の要素が、また後者の結果では自己観得点の中に他者観の要素が、いくらか含まれていることを示唆するものといえよう。この理由として、一つの可能性は、自己観・他者観の形成が発達過程で繰り返される相互作用に基づくため、両者が共有する要素を形成するようになったためという考え方である。もう一つは、用いた尺度の性質による可能性も否定できない。この点については、今後、さらなる理論的・実証的な検討が必要であろう。

#### 既存尺度と Griffin らの算出法による得点との間の相関

Rosenberg の自尊感情尺度・加藤の他者観尺度と Griffin らの算出法による自己観得点・他者観得点との相関を求めたところ、2つの自己観尺度の得点間では  $r=.41$  ( $p<.001$ )、また2つの他者観尺度の得点間では  $r=.42$  ( $p<.001$ ) の中程度の相関が認められた。よって、これらの尺度の間にはある程度同じ側面を測定しているといえるが、また異なる側面も含んでいることを示唆する。自己観・他者観の内実を更に概念化し、より理論に適合した側面を測定する尺度の開発が望まれる。

## 考 察

本研究の目的は、Bartholomew らの RQ の日本語版を作成し、その構成概念妥当性を検討することであった。その際、特に教示や尺度項目の表現を、一般他者を愛着対象とする場合に限定した。その結果、理論的に想定される予想は、大筋のところでも支持されたと言える。言い換えると、日本語版 RQ において構成概念妥当性があることが確認された。

だが、尺度構成という観点からすると、更に次の課題が残されている。すなわち、今回は、自己観・他者観の指標として、Rosenberg の自尊感情尺度と加藤の他者観尺度を用いた。だが、今後更に異なった関連尺度を用いて構成概念妥当性の検証が必要であろう。また再テスト法による信頼性の検討が必要であろう。

### 理論的考察と残された課題

次に、RQを有効な尺度として認めた上で、更に次の点を議論する必要があるだろう。それは、①自己評定尺度としてのRQ、②愛着対象の問題、③得られたスタイルの比率の文化差をどのようにとらえるか、④甘えと愛着との違いをどのようにとらえるのかななどである。

#### 1. 自己評定尺度としてRQ

自己報告にもとづくRQと行動レベルでの観察結果にもとづきタイプを分類するSSP法<sup>4</sup>では、どの程度対応性があるのかは、今の時点では明らかでない。よって、RQで測定されているものは、意識レベルでの自分の感じ方を反映したものであると捉えた方がよいだろう。確かに、Bartholomewらでは、面接で友人関係・恋愛関係についての回答を求めそれを評定しタイプ分けし、その結果とRQ評定の結果とが対応するということが統計的に確認されている。だが、このいずれの方法も、SSP法で測定される行動レベルでの指標とは異なった側面を反映している可能性がある。その意味でも、RQと行動レベルでの指標との対応関係の分析が、今後なされる必要があるだろう。

この点と関連して、成人での愛着行動とはどのようなものなのか、更にはどのような愛着行動(パターン)がどの愛着スタイルと対応するのかといった問題も明確に取り上げ、検討していく必要があるだろう。というのは、Hazanらの研究の流れをくむ成人愛着研究では、3つの愛着スタイルを、Ainsworthらの愛着行動パターンの記述を成人に合わせて翻訳することで尺度項目を作ったとしている。だが、尺度項目を見る限り、対人関係の中でどのように典型的に感じたり思ったりしているかを問うものとなっており、愛着行動自体を扱うものとはなっていない。であるとすると、これらの研究者は、ある感じ方のスタイル(例えば、安定型)を持つ者は、ある愛着行動パターン(例えば、安定型の幼児の愛着行動パターンに類似したもの)を示すであろうという暗黙の前提に立っていることになる。だが、この前提を明確に検証してみる必要があるのではないだろうか。

#### 2. 愛着対象としての一般他者とは

本研究ではRQへ回答する際、一般他者を念頭に置きながら回答するように被験者に求めた。そのため、本研究結果は、一般他者に対する愛着スタイルを測定した結果と考えられる。では、愛着対象としての一般他者とは何か。ここでは、少なくとも次のようなものと想定する。

Bowlbyは愛着行動パターンにおける個人差が、個人の主要な養育者との間で行われた愛着行動のパターン(IWM)がまず形成され、それがその後の対人関係のプロトタイプとなると仮定している。乳幼児期では、対人関係が限られているため、愛着行動を行う対象が限られる。

だが、児童期以降は、徐々に主要な養育者を離れ、いろいろな人との関係を持つようになる。と同時に、distressfulな状況におかれたとき、主要な養育者に対して愛着行動で安全感を回復したり維持したりできなくなる状況に遭遇することが多くなる。こうした場面では、より親密な他者を見つけ、愛着行動を通して安全感を回復・維持することが必要となる。この過程で、個人は複数の愛着対象への愛着行動をするようになって考えられる。

このように複数の対象に対して愛着行動をするようになる場合、初めは主要な愛着対象への愛着パターンを異なった新奇の対象に適用すると予想されるが、そのIWMがうまく適用できない場合には、この新奇の対象をaccommodateできるようにIWMを修正・拡張するかあるいはその対象に固有の新しいIWMを形成すると考えられる。そして更に、認知発達が進むにつれて、これらを全て包含する「愛着行動に関するより一般化されたIWM」が形成されると想定される(cf. Collins & Reed, 1994; 加藤・丸野, 1996)。このより一般化されたIWMが、一般他者に対する愛着スタイルと考えることができるだろう。

では、一般化された他者への愛着スタイルはどのような時に典型的に観察されるのであろうか。それは、愛着行動をする必要がある状況下で親密な他者が存在しない場面である。すなわち、安全感を回復したいと思っても直ちに通常愛着行動を行う対象がavailableでないとき、身近に存在する親密でない他者に対して愛着行動をしなければならない場面である。言い換えると、一般他者への愛着スタイルは、新奇場面(状況や人)での愛着行動パターンを予測するのに適していると考えられる。また、初対面の人への関わり方も一般他者への愛着スタイルが反映されやすいと予想される(e.g., 加藤・丸野, 1997)。というのは、初対面の人と関わることで自分がストレスフルな場面であると同時に、安全感を制御するためにその対象をどのように利用できるかということが、愛着スタイルと深く関わると考えられるからである。

#### 今後の課題

・愛着対象間の愛着スタイルの一致度

Bowlbyが想定するように、最初に形成された愛着スタイルはその後の対人関係のプロトタイプとなり、その後の対人関係を規定するのか。言い換えると、異なった愛着対象への愛着スタイルの間で、どの程度の一致度があるのかを検討する必要があるだろう。

・愛着行動に関するIWMの構造

一般他者、特定関係一般(例、友人関係、恋愛関係、

4 なお、これらの研究は、本研究と次の点で異なるので指摘しておきたい。①対象が幼児である。②愛着対象が母親である。③行動レベルの指標を用いている。④3分類のモデルにもとづき分類を行っている。

家族関係一般), 特定他者に対する愛着スタイルを比較検討する必要があるであろう。というのは, 問題でも指摘したように, Bartholomewらの研究結果は, 友人関係一般に対する愛着スタイルを反映しているのかあるいは(本研究で行ったように)一般他者に対する愛着スタイルを反映しているのかが, 明らかでないためである。また, 母親・父親あるいは特定の恋人・親友を想定させる場合は, 上述の2つのレベルでの愛着スタイルとどのような関係にあるのかも検討する必要があるであろう。

### 3. 文化差: 日本でもっとも prevalent な愛着スタイルがとらわれ型であるのはなぜか。

本研究結果は, アメリカでのデータと愛着スタイルの頻度分布に大きな違いがあった。すなわち, 日本ではとらわれ型が非常に多く, 逆に安定型が予想以上に少ない。このことは, Bartholomewらの理論的枠組に沿って考えるならば, 日本人は自己観が比較的ネガティブで他者観はポジティブな人が多いということを示唆するものである。

愛着分類における文化差に関連する研究として, Miyake & Chen, Campos (1985)の研究が挙げられる。彼らは, 日本の幼児25名をSSP法で査定したところ, 安定型(72%), 両価型(28%), 回避型(0%)という結果を得た。この結果について, 彼らは, 他国の結果に比べて, 両価型(とらわれ型に近い)が多いことを指摘している。ただ, その論文に報告されている他国の結果をみると, 国により prevalent な愛着パターンが異なることがうかがわれる。例えば, イスラエルの結果では, 不安・両価型(50%)が最も多く, 次に安定型(38%)となっており, またドイツでは回避型(49%)で最も多く, 次に安定型(33%)が来ている。このように, SSP法による分類でも, 国により愛着パターンの出現頻度の分布は大きく異なることがうかがわれる。このことは, SSP法で測定される側面も, 文化的影響を大きく受けていることが示唆している。これと同様で, RQで測定される愛着の側面にも文化的影響を大きく受けている可能性が高い<sup>4</sup>。であるとするならば, 愛着パターンの出現頻度の分布がどのくらい普遍的なものなのか, また安定型と不安定型という区別が果たしてどのくらい妥当なのかといった点も今後理論的に精緻化される必要があるだろう。

特に, 愛着理論から離れて, 文化心理学的な観点から考察すると, この結果はむしろ興味深いものであるといえよう。というのは, とらわれ型の対人関係の取り方は, 日本人の間ではむしろ好ましい対人関係の取り方と類似しているからである。すなわち, 他者を自己より上位に置き, 相手に合わせて自己の行動を制御するという他者依存的(あるいは他者中心的)な関係の取り方であるからである(濱口, 1972; Kato, 1995; 加藤・丸野, 1996)。であるとする, とらわれ型の行動パターンの方が, 日本文化の中ではもっと対人的にはadaptiveである

可能性も否定できない。このように, 愛着スタイルあるいはパターンを, 文化の中での対人関係の規範との観点から再吟味し, 検討してみる必要もあるであろう。

### 今後の課題

- ・本研究結果の一般性の検討  
被験者数を増やし, より大きなサンプルで本研究の日本人における一般性を確認することが急務である。
- ・愛着行動のパターン形成に及ぼす文化の影響の検討  
上の問題との関連で, 本研究で得られた(一般他者との関係での)愛着スタイルの出現率の違いは, 年齢的にどこまで遡って確認できるのであろうか。
- ・愛着スタイルの分布はどの程度文化的に普遍的なのか  
今, 研究者の持つ前提は, 安定型が一番望ましい形態であり, 最も prevalent なスタイルであるというもののだが, 成人愛着に関する研究は, 西欧文化圏以外の文化では(本研究を除いては)まだなされていない。今後, 欧米文化圏以外での調査をする必要があるだろう。
- ・不安定型に属するすべての人が, 本当に心理的に不適応なのか。

文化によってより適切な対人関係スタイルが異なる。とするならば, 同じ不安定型のスタイルに入っている人の中にもむしろ文化的に適応したタイプの人(つまり心理的には健康な人)と真の意味で不安定型の人とが存在する可能性はないのであろうか。

### 4. 愛着と甘え

愛着(厳密には愛着行動)と甘えとは, 理論的には次の点で異なると考えられる。Bowlby(1969/1982)の愛着行動の理論によると, 愛着行動は基本的に個人が身体的・心理的な危険・危害を感じるときに安全感を回復したりそうした危害から守られ安全感を維持したりするために発動される行動である。Bowlbyは, 欲求(need)という概念を使うことを注意深くかつ意識的に避けているが, 敢えて言えば愛着行動とは「安全性への欲求(need for security)」により発動される行動である。それに対して, 甘え行動は, その根底に「積極的に愛されようとする」欲求(need for actively being loved)によって発動される行動であると考えられる。すなわち, 他者から愛されようとする行動, 愛されていることを前提としての勝手に振る舞う行動(さらには, そうすることで愛されていることを確認しようとする行動), そして愛されていることを享受する行動である(Kato, 1995)。(因みに, 土居(1971)は, 一体化欲求という表現を用いている。)いずれにせよ, 甘えは, 愛着のように必ずしも身の危険から安全感を回復することを必要条件とはしない。愛着行動と甘え行動は, 一見, 行動レベルでは同じ行動に見えることもある。また, 同じ行動のもとにこれら2つの欲求が同時に活性化されることもありうる(Kato, 1994/5)。よって, 両者を識別するためには, これらの行動が



どういう動機のもとに行われているかを明確にすることが重要となる。

以上の点を踏まえ、本尺度を検討してみよう。この尺度は少なくとも項目レベルでは、他者との関係に次のような特徴(すなわち、「心が通じ合う」「頼ったり頼られたりする」「親密な」「私のことを大切に思う)があるかどうかで愛着スタイルを規定していると読むことができる。そのため、RQは、甘えの要素もある程度が測定している可能性が高いと推定される。もし愛着や甘えという概念にそれぞれ独立した存在意義があるとするならば、今後、実証的レベルで両者を識別する方法の開発が望まれるだろう。

### 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Attachment (Vol. 1, 2nd ed.)*. New York: Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss: Separation (Vol. 2)*. New York: Basic Books.
- Carlson, V., Cicchetti, D., Barnett, D., & Braunwald, K. (1989). Disorganized/disoriented attachment relationships in maltreated infants. *Developmental Psychology*, 25, 525-531.
- Collins, N. L. & Read, S. J. (1994). Cognitive representations of attachment: The structure and functions of working models. In K. Bartholomew & D. Parلمان (Eds.), *Advance in personal relationship*, 5, *Attachment process in adulthood* (Pp. 53-90). London: Jessica Kingsley Publishers.
- 土居健郎. (1971). *甘えの構造*. 至文堂.
- Feeney, J. A. & Noller, P. (1990). Attachment style as a predictor of adult romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 281-291.
- Fiske, S. & Taylor, S. (1991). *Social cognition (2nd ed.)*. New York: Random House.
- Griffin, D. & Bartholomew, K. (1994). The metaphysics of measurement: The case of adult attachment. In K. Bartholomew & D. Parلمان (Eds.), *Advance in personal relationship*, 5, *Attachment process in adulthood* (Pp. 17-52). London: Jessica Kingsley Publishers.
- 濱口恵俊. (1972). 「日本人らしさ」の再発見. 講談社.
- Hazan, C. & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- Kato, K. (1994/5). An analysis of *amae* processes and interactions: A review and a proposal of process models. *Journal of Cognitive Processes and Experiencing*, 4, 1-26.
- Kato, K. (1995). *Empirical studies of amae interactions in Japanese and American adults: Constructing relational models and testing the hypothesis of universality*. Unpublished dissertation, University of Michigan (UMI Microform 9542870, Ann Arbor, MI: UMI Company).
- 加藤和生・丸野俊一. (1996). 議論の概念的分析: 概念的定義と議論に関わる諸側面や要因の特定化. 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 41 (1), 81-111.
- 加藤和生・丸野俊一. (1997). 議論スキルや態度を育む要因の探索: 家庭での議論と愛着スタイルの観点から. 認知・体験過程研究, 6, 59-71.
- 加藤和生. (1998). 他者観尺度. 九州大学教育学部未発表原稿.
- Kobak, R. R. & Sceery, A. (1988). Attachment in late adolescence: Working models, affect regulation and representation of self and others. *Child Development*, 59, 135-146.
- Main, M. & Weston, D. (1981). The quality of the toddler's relationship to mother and to father: Related to conflict behavior and the readiness to establish new relationships. *Child Development*, 52, 932-940.
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. (1985). Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In J. Bretherton & E. Waters (eds.), *Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 66-104.
- Miyake, K., Chen, S.-J., & Campos, J. J. (1985). Infant temperament, mother's mode of interactions, and attachment in Japan: An interim report. In I. Bretherton & E. Waters (eds.), *Monographs of the Society for Research in Child Development*, (Serial No. 209), 50 (1-2), 276-297.

## Appendix

RQ尺度日本語版  
(Bartholomew & Horowitz, 1991)

1. あなたが、いろいろな人間関係の中で経験する「人に対する感じ方や考え方」には、一般的には次のような4つのタイプがあると言われています。あなたはそれぞれのタイプにどのくらいよくあてはまりますか。当てはまる番号に○印をつけてください。下線は真ん中です。

全くあてはまらない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 非常にあてはまる

**タイプ1 (安全型, secure)**

私にとって、人といつも心が通じ合う関係を持つことは、簡単である。私は人に頼ったり頼られたりすることに抵抗がない。私は一人ぼっちになってしまうとか、人がありのままの私を受け入れてくれないのではないのかということを心配しない。

全くあてはまらない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 非常にあてはまる

**タイプ2 (拒絶型, dismissing)**

私は人といつも心が通じ合う関係がなくても平気だ。私にとって大切なのは、人に頼っていないと感じること、自分で何でもできていると感じることだ。私は人に頼ったり頼られたりすることが好きでない。

全くあてはまらない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 非常にあてはまる

**タイプ3 (とらわれ型, preoccupied)**

私は人と完全に気持ちが通じ合うようになりたい。しかし、人は私が望むほど私と親しくなりたいと思っていないと思う。私は親密な関係を持ちたいのだが、私が人のことを大切に思うほど人は私のことを大切に思っていないのではないかと心配になる。

全くあてはまらない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 非常にあてはまる

**タイプ4 (恐れ型, fearful)**

私は人と親しくなることに抵抗を感じている。私は人と心が通じ合う関係を持ちたいのだが、人を信じきることは出来ない。また人に頼ることが苦手である。人とあまりにも親しくなりすぎると傷ついてしまうのではないかと思う。

全くあてはまらない 1 ----- 2 ----- 3 ----- 4 ----- 5 ----- 6 ----- 7 非常にあてはまる

2. 次に、上の4つのタイプ(タイプ1～タイプ4)の中で自分に最も当てはまるタイプを1つ選んでください。

該当するタイプ 1つに○印を==>      **タイプ1**      **タイプ2**      **タイプ3**      **タイプ4**